20043

下肢動脈高度石灰化病変における下肢３ＤＣＴＡ画像の検討

[1]亀田総合病院

永井　基博[1]、加藤　光久[1]、吉田　弘樹[1]

【目的】下肢の閉塞性動脈硬化症（ＡＳＯ）の診断・術前評価として、下肢動脈３ＤCTA が盛んにおこなわれている。その中で、高度狭窄病変はＰＴＡの適応となるが、ABI、下肢３DCTA の検査が行われる時点ではスクリーニング検査の段階であり、まだ手術やＰＴＡを行うかどうか決定していない。PTA を行うことが決定している症例であればサブトラクション処理を行えるようなCT 撮影も可能である。しかし診断の時点でのCT 撮影で全症例サブトラクション 3DCTA を撮影していくのはなかなか難しいのが現状だと思われる。下肢PTA 術前の３DCTA で、求められる情報は狭窄の度合（TASC 分類などの評価）血管の状態等であるが、高度石灰化病変での血管の状態はAx1 画像、MPR、VR、MIP では評価が難しいと思われる。そこでGradentMIP では石灰化部分を削除できるので治療支援に繋がるかどうか検討を行った。【方法】3DCTA とPTA を施行した症例１２例3DCTA（GradentMIP）とアンギオにおいてのバルーンサイズ、ステント径の計測を行い比較検討を行った。【結果】下肢ＡＳＯ症例において全例でのサブトラクション撮影は困難ではあるが、GradentMIP の作成により、高度石灰化狭窄病変の内腔情報の描出が可能であった。【結語】GradentMIP は臨床的（治療）に有効であると思われる。